

カザフスタン共和国国立博物館での考古学研修

奈文研は文化庁の委託により、2019年4月から、カザフスタン共和国国立博物館を相手国拠点とし、考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業を開始しました。11月19日から22日まで国立博物館に研究者3名を派遣し、①レプリカ法による土器の圧痕分析と、②土器に残存する脂質の分析の研修をおこないました。

①は土器の表面に残る植物等の圧痕にシリコンを注入してレプリカを採取し、それを走査型電子顕微鏡で観察して、植物等の種類を同定する方法です。明治大学の佐々木由香さんがこの方法について説明し、その後、カザフスタンの初期鉄器時代の土器を用いて実習をおこないました。受講者は専用キットを使って圧痕のレプリカを採取しました。②は土器の胎土に残された脂質を抽出・分析することで、土器で調理された食物をあきらかにする方法です。奈文研国際遺跡研究室室長の庄田が、はじめにこの方法の概要を説明し、東アジア各地の先史時代の土器の分析から得られた成果を報告しました。次に、カザフスタンの青銅器時代・初期鉄器時代の土器片を用いて、試料を採取する実習をおこないました。

4日間の研修には、国立博物館の研究員の他、国立ユーラシア大学、ナザルバエフ大学の教授・学生など27名が参加しました。参加者からは、本研修を通して新しい土器の調査方法について知ることができた、他の研修と違って実習も含まれているのがよかった等の感想が寄せられました。今後も考古学研修を通して、カザフスタンの文化遺産の調査・保存を担う専門家との技術交流・研究協力を続けていきます。
(企画調整部 影山 悦子)



レプリカ法による土器の圧痕分析の実習